

一般演題1 O1-1

高気圧酸素治療の現状について

～ユーザーにおける運用状況 2019-2020年～

石曾根清一

エア・ウォーター株式会社 医療カンパニー 医療事業部
医療機器推進部

【緒言】

日本で起きた高気圧酸素治療装置での最も大きな事故から四半世紀が過ぎた。いまだにこの事故が国内で発生した最後の事故であることは、ひとえに関係する医療従事者の並々ならぬ努力の賜物と想像される。

この事故は残念ながら当社の装置で起こってしまったこともあり、弊社では二度と同様の事故が発生しないことを願って、事故が起こった1996年より毎年、肌寒くなりカイロの持込等のリスクが高まる秋口から、納入先全施設を訪問し、実際に治療に携わる方と顔を合わせ、安全使用に関する啓発活動を行っている。また、2017年より啓発活動と合わせて運用状況に関するアンケートにご協力頂いている。

調査対象は、弊社取扱装置が現在設置されている施設とし、稼働・未稼働の状況は問わず、全てを対象とした。ただし、使用できない状態で設置されている装置は除外した。

調査項目は、処方診療科、適応疾患別稼働回数(複数回答可)、生体モニターの有無と使用頻度、加圧方法等を調査した。

今回はこの調査から見えてくる、弊社ユーザーの装置との関わり方について分析した結果を報告する。

【調査結果】

2020年度対象施設は216施設、3/31現在184施設から回答を得られた。

対象施設の規模を表す病床数の平均は287床で0床のクリニックから最も多い病床数を有する施設は1,379床であった。

保有台数の平均は1.19台で対象施設の約85%は1台のみの保有であったが、約15%の施設が複数台所有しており、最も多く所有する施設は6台であった。2017年と比較すると複数台所有施設は20施設から34施設と14施設増加していた。

93%の施設が酸素加圧で治療を行っており、空気加

圧もしくは酸素・空気切替可能な施設は7%であった。

年間の治療件数は全施設合計で約100,000回、1施設当たりの年間平均治療件数は625回であった。最も多い施設では年間約8,000回の治療を行っていた。2019年は全施設合計が約70,000回で年間平均治療件数は約490回であり、この1年間で全体で約30,000回、各施設平均で約130回治療件数が増加していることが分かる。

治療件数が100回未満の施設は2017年で全体の約23%であったが、2020年では約17%と6%減少していた。逆に年間1,000回以上の治療を行っている施設は9.8%から15.6%と約6%増加しており、診療報酬改定前と比較して多くの施設で治療件数が増加していることが伺えた。

対象となる診療科における処方施設数は、脳神経外科が78施設と最も多く、次いで外科が65施設であった。前年差を比較すると外科で16施設増加、形成外科で12施設増加、泌尿器科で11施設増加、脳神経外科で10施設増加であった。

適応疾患別の処方のある施設数は突発性難聴：93施設、骨髄炎又は放射線障害：91施設、難治性潰瘍を伴う末梢循環障害：89施設、脳梗塞：85施設、腸閉塞：83施設であった。前年差を比較すると骨髄炎又は放射線障害：27施設増加、放射線又は抗癌剤治療と併用される悪性腫瘍：23施設増加、とがんと治療に関連する適応疾患での治療に取り組み始めた施設が増加していることが分かる。

【結語】

以上のように2018年の診療報酬改定から3年を経過した2021年現在においても新規採用施設は増加しており、また既存施設においても治療件数は増加傾向にある。

今まで治療で採用されることの少なかったがん治療に関連する適応疾患での使用を開始する施設が増加しており、ハイパーサーミアなどを併用する集学的治療の一つとしてHBOを採用する施設も増加しているように伺える。

がんは長年日本人の三大死因の第1位であり、治療に難渋する患者も少なくない。

今後、がん治療との併用での運用方法も含め、さらに豊富なエビデンスが構築され、HBOがより多くのがん患者の救命の一助となることが期待される。